

惠心教學私見一、二

白 土 わ か

惠心の佛教學は多岐廣範にわたつていて、その著、一乘要決に

全捨自宗多宗之偏黨、專探權智實智之深奧遂得一乘真實之理云々
と述べられてあること、又、大乘對俱舍抄卷十四には

問、雖披聖教勤修若少、恐於佛道无半錢分、答、隨聞一句尙即了
因、鑽仰習學豈是唐捐乎、彼野干之生兜羅非天帝之所能、乃速疾
縱无分、將來遂可得、況復佛法有无量門云々

と見える點よりしても、廣い佛教學の視野からその立場を求めようとした態度がうかがわれ、同時に又、惠心の教學は念佛の往生要集を以て、その眞意とすべきなのか、前掲の一乘要決とすべきなのか俄かに決しがたいが、ここでは、惠心教學の中に、とくに有的傾向が指摘されるのではないかという私見のもとに、一、二の考察をすすめてみたいと思う。

往生要集卷上は、六道のさまを述べて如實な實在觀を以て

惠心教學私見一、二（白 土）

人にせまるのであるが、その引用經論は、智度論、瑜伽論、俱舍論、正法念處經、優婆塞戒經、觀佛三昧經等にわたるが、その中、とくに多く依用されるのは正法念處經であり、ついで瑜伽論、智度論、俱舍論である。これらの經論は、何れも六道の具象的な描寫にくわしいが、惠心はそれらによつて、如實なる實在感を示しつつ、書きしるしたのである。そうして、これらの經論は、何らかの意味で、有的、具象的性格をもつものである。最も多く依用される正法念處經は、説一切有部に近い經典であるとされ、智度論もまた同じ性格をもつものであるといわれる。又、惠心が俱舍論や瑜伽論に深い關心を示していることは、往生要集の引用の他に、大乘對俱舍抄の大著や俱舍論頌疏正文、俱舍疑問等のあるのによつても察せられるが、大乘對俱舍抄序には

俱舍論者三藏玄旨六足明鑒也、三千軸中諸法體用凡聖因果盡焉、月支呼爲聰明論、良有以哉、予以大乘論無如此者爲恨尙矣、云々
といい、俱舍論研究への熱意を見せているが、大乘の諸經論、

ことに唯識の諸論との對比において述べ、結末に大乘の俱舍にまさる點として、阿頼耶識、三性、唯識性、菩薩十地等の十箇條をあげるが、これらよりしても、惠心が俱舍、唯識の學に並々ならぬ關心をよせていたことが知られるものであり、その性相の學徒としても、有的なものへの接近がうかがるのではないかと思う。又、往生要集には、極樂のさまを記述するのにも、六道の箇所と同様の方法がとられ、平等覺經、双觀經、觀經等によつて、それらが具象的にかたられてゐる。尤も、往生要集の六道、極樂の描寫は、厭離穢土の方便として説かれたものとも云われるであらうが、單なる方便でなかつたことは、さきに述べた惠心の性相の學徒としての態度よりも云えるのではないかと思う。

二

次に、惠心の有的傾向ということと、天台教學の諸法實相論について、ふれてみたい。このことは強いて惠心に於てのみ云われ得ることではないが、それが惠心の中にも一つの基底となつていたのであらうと思われるからである。眞如觀（傳惠心という）の中にも、十界は實相である、眞如であるといひ、十界互具の諸法實相論と關聯して、そこに有的性格を觀取できる。實相論はもともと天台教學の本命とするところであり、十界も實相、治生產業に至るまで實相とせられる。實相とは

羅什譯中論によれば、不生不滅、言語道斷のところであるが、天台の諸法實相論の正しきより所は、羅什譯法華經方便品の十如是諸法實相である。羅什は、その翻譯にあたつて、大智度論卷三十二等を依用しつつ、意譯したものであるが、勿論、それは法華經の前後の性格よりしてそうしたものと思われるが、智度論そのものが、有的な性格を帶びてゐることは、すでに記した通りである。羅什は大乘大義章には實相について、更に具象的に述べて、地堅性水濕性火熱性の如き諸法の相、更に炎は上り水は低きに流れる諸法の相が實相であるとうたつてゐる。天台の實相論もこの系譜を受けつぐものであつて、もとより因緣所生法の空であることには違ひないが、この實相論の特色を考へてみる必要があるかと思う。この天台の法華教學の基盤が惠心の中にあつて、十界も實相であり即ち往生要集の六道も、極樂も實相であり、それが性相的性格をあびて、有的な具象性をもつて示されたのではないかと思われる。惠心は又、十如是義私記の中に

如是相者一切衆生皆有實相、本自本有、之乃如來藏之相貌也

ともいつてゐるが、本有は本覺でもあるが、それについてはのちにふれることとする。

三

大乘對俱舍抄においては、俱舍の秀れたことを稱揚しつつ、

大乘に軍配をあげて、唯識の利點を示していることは先にのべたが、唯識、唯心という點について、惠心は、觀心略要集の中に、觀心の樞要なことを力説しているが、その心は本覺心で、唯心のみ實であるといつてゐる。

本自不眠夢自性覺之故、非眠夢多、非谿悟一、只有自性清淨本覺心而實也、無明夢中六塵境界、本覺心假用故虛僞也……只可達本覺云々

と、又

唯識論云、未得眞覺、常處夢中、故佛說爲生死長夜云々、我等何時得眞覺、飄今生死爲昨夢、彼春夜夢不欲醒而自有醒之期、此生死夢、不發心雖經塵劫不覺、是故起大加行、誓得法性之覺云々

と、自性清淨の本覺心を力説するのであるが、また、この心を

假諦三千性相者、如夢中修因感果、空諦亡泯三千因果、如求夢中依正而空、中道卽是空假體性、如夢所見諸法卽心性也、修性不二、萬法唯心、以之可悟、諸法萬差、無不一心

と、三諦を夢と觀する心のみ實なりという。この心が三諦の諸法を作るのであるが、諸法が心であり、心が諸法である。實の如くに觀ぜられた境は、次元を異にして、具象性をもつて語られようとする。觀心略要集にはつづいて、極樂の依正は、三界道に勝過して、虚空の如く邊際なく、瑠璃をもつて地となし、眼にさえぎるものは曼陀曼殊の境界として觀ぜら

れる。而して彌陀の白毫は唯心の毫相であり、彌陀の依正は淨業の因縁より生じ、中道であり、實相であるといわれる。惠心にあつては、唯心の境界は、本覺心の本有であり、萬法唯心であり、色心不二の立て前から、更にそれが具象性をもち、有的な性格をもちながら語られようとしたのではないかと思われる。

四

さらに、惠心流の口傳とされるものの中に、惠心の思想の展開をよみとることができるといふ想定のもとに、以上の論點を更に裏づけるものとして考えてみたいのは、妙行心要集の略觀三諦の條に

彼佛一念既是不生、眉間毛相、體是無生、故此無性心性白毫、具一切法、自然妙有、心外無境、毫亦是心、無作天然卽心之毫……心外有毫、不名唯心、毫外有心不名唯色云々

とある様に、法爾として空であり中であり、妙有であり、又妙空、妙中でもある。それらは諸法實相論ともいふべく、有的なものが、根底にあつて展開している様に思われるのである。又、眞如觀には、諸法實相とは、萬法眞如であるという事であり、地獄も眞如、畜生も眞如、十界は實相であり、眞如であり、佛であると述べ、實相念佛といわれる所以であるが、眞如は本覺の理といわれている。本覺門が有の性格をも

つことは、天台の法華教學の中に看取できることと思われるが、惠心の教學は、本覺門を立場とし、その師、慈惠より本覺門を受け、覺運が始覺門を受法したとは普通いわれることであつて、事實、本門をより重視した。いわゆる本覺讚釋なるものもあり、その意赴はよくうかがえるが、迹門を理とするなら本門は事であつて、

佛爲衆生說如火宅、此則理常平等、常平等故、常住法位、事常差別、常差別故從緣起¹⁹

と本覺讚釋にいう如く、事は差別であり、緣によりて起れるものである。平等にして差別、差別にして平等なるものであるが、その事の差別面に重點をおく惠心の立場を考慮すべきであろう。惠心流の口傳である枕雙紙には、それらがより明瞭に示されている。惠心は論議の大家であつたし、この様な口傳にも惠心の傾向は充分に展開していると思われるが、枕雙紙によると

迹門理家三諦也、故云理三諦、本門事家三諦也、故云事三諦、但事理云事、能々可得意也、理者、雖諸法差別、如々故歸一也、事雖有萬法差別、於理全無差別、泯諸法也、事者、不泯諸法、自體而常恆也、故迹門泯諸法故、圓融妙理三諦也、本門諸法不泯、唯當對云衆生乃至云佛也、故事々法體不改、云假、云空、云中、全不論泯不泯也、是故、本門三諦、超過迹門三諦、云々

とあるのは、興味深い點で、惠心の傾向がより濃厚に打出さ

れていつたあととも察せられるが、差別のまま、當對のまま、みとめてゆく本門を、理の空に超過するといつてゐるのに注目すべきことと思う。いうまでもなく本門の事は、本覺心の作るところであるが、その差別の境界をそのままとめてゆこうとするところに、惠心の具象性、有的傾向が見られるかと思う。同様のことが又、

諸教假、萬法雖森羅、皆依因緣假和合云假、全非常住也、一家假者不然、萬法常住故假常住也水常住波常住也、法身常住假常住也、と、常住なる法身と常住なる假と説き、又、他の箇所には、假諦常住なるが故に勝るのであつて、空、中の理と相對的に考えられた假でもなく、本來法爾として不生なる假常住であるともいい、假の重視につよく傾いてゐることをしる。又、同じく枕雙紙の一心三觀三觀一心事に¹⁹

迹門、宣萬法一心、一切諸法、只是談一理法性、一切諸法、只是談一佛乘也、爾間、何合諸談一也、故迹門、以三觀一心爲宗也、本門、萬法必歸一不云也、但本門、一切諸法本源故、法界本自本門體也、諸法自爾體故、不云一、不云三、雖然、教門日辨淺深時、本門一心三觀正意也、迹門、爲談法根源故、三觀一心意旨、迹門明之、萬法歸一故、所詮迹門說理實相故、三觀一心意也、本門說事實相故、一心三觀意也

と、迹門は三觀一心であり、本門は一心三觀であるときめてきて、本門は事の實相を説くものとし、本門をこそ正意を得

たるものとしている。又、圓融三諦に勝劣なく、勝劣を考へるならば假諦は勝れ、空諦と中諦とは劣ると、はつきり示されている。事と假との重視はこれで明らかであるが、本覺門を立場とする惠心の特色を知りうるかと思う。

往生要集には、有部に近い經論や、その具體的描寫にくわしい經論を引用して、六道極樂のさまを實在感をもつて説述した惠心は、俱舍論に造詣深い、又、唯識の學徒、即ち性相の學徒でもあつた。而して又、その所屬した天台教學においては、本覺門に立つて諸法實相の理を身に體していた。そこでは事であり假であつて、性相ではないが、觀心ということを経として、性相と事、實相とが、關聯しあつたのではないかと思われる。それをかりに、有的とここにいつたのであるが、それは具象性をもつて語られ示されようとした。抽象よりも具象に重きをおく惠心の立場は、それ故にこそ、一般文化へのつながりを大きくもち得たのではないかと思われる。平安文學とのつながりもそうであるし、又、惠心作といわれる佛畫や彫刻の類、又、一般人の信仰を促したのもそうであつた。いわゆる觀心の具象、有への傾向が、平安時代の思想、文化に影響をつよくあたえる一因であつたと思われるし、又、一般文化そのものが、そうした影響をうけたものと考えるのである。

又、慈惠より惠心は本覺門を相承し、惠心流の祖とされ、

覺運は始覺門を相承、檀那流の祖となるわけであるが、始覺門に立つ覺運には、俱舍、唯識等に關する著書は見あたらず、^② いわば傳統的天台學徒である。その覺運の影響下には繪畫も彫刻もなく、ことに惠心の二十五菩薩來迎圖の如きはない。檀那院覺運との比較においても惠心の有的傾向を的りうるかと思う。

- 1 惠心僧都全集第二卷一頁
- 2 同 第四卷八六三頁
- 3 國譯一切經經集部八三頁參照
- 4 平川彰教授「律藏の研究」一二二頁參照
- 5 專心僧都全集第四卷一頁
- 6 大正藏經二五卷二九七頁
- 諸法如有二種、一者各各相二者實相、各各相、如地堅相水濕相火熱相風動相、云々參照
- 7 大正藏經四五卷一三五頁〜一三六頁
- 8 專心僧都全集第三卷一頁
- 9 同 第一卷二八〇頁
- 10 同 第二卷二五七頁
- 11 同 第五卷四六八頁
- 12 同 第三卷四七三頁
- 13 同 四七七頁
- 14 日本天台宗典目錄二九頁